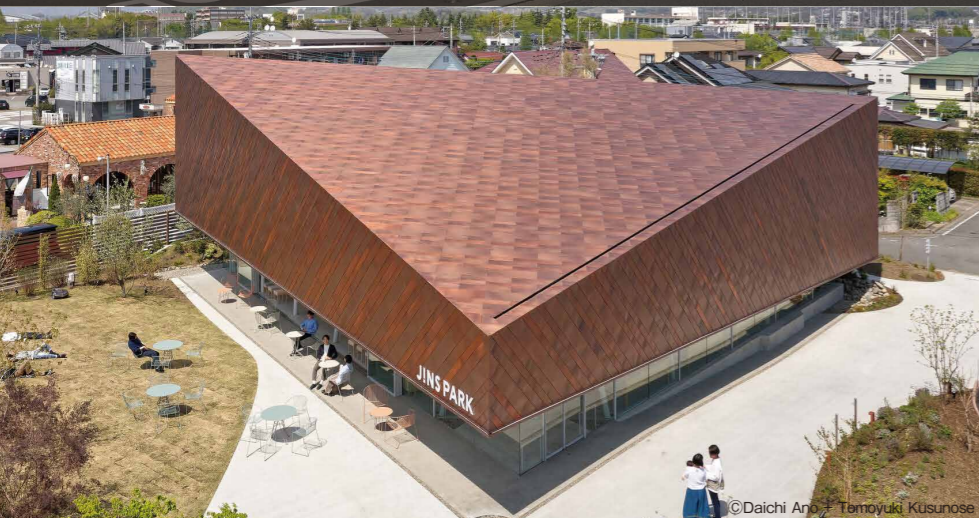




周囲の環境に合わせて、形状は一定ではなく、見る角度によって形が異なる。



屋根のサイドに設けられた黒い溝は、雨水を排水するための樋。シャープなラインを出すため、樋の幅は極限まで縮められた。

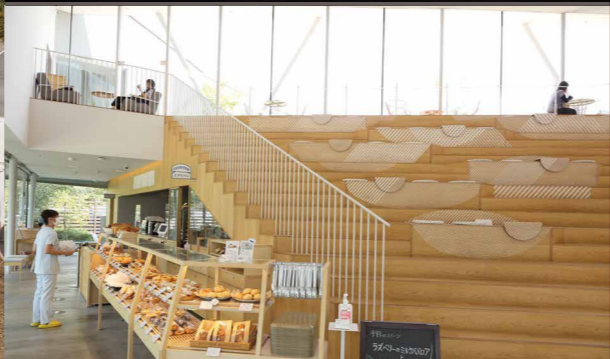


壁面は斜め葺きで施工されている。葺き板それぞれ手作業の硫化処理による色斑がグラデーションとなり、繊細な表情を生み出している。



©Daichi Ano + Tomoyuki Kusunose

夜はライトアップされると、斜め葺きのラインが綺麗に浮かび上がる。



建物内部の大階段の奥には大きな窓を設け、綺麗な空を内部に取り込んでいる。ベーカリーカフェも併設し、人々が集う憩いの場となっている。

やさしさを銅で表現 このうえなく美しい建物が出現



「JINS PARK 前橋」青々とした空に凜とそびえる建物が出現する。

東京から車で2時間、前橋に着く。車のドアを開けると、外気温は39℃。猛暑にふさわしい、青々とした空に凜とそびえる建物が出現する。こっくりとした高級チヨコレイトのような茶色の箱が浮かび上がり、圧倒的な存在感を放つ。そのチヨコレイト色の外壁と屋根は銅でできている。銅の表面をよく見れば、細かなパーツが複雑に編み込まれ、まるでチヨコレイトを大事にラッピングで包み込んだようである。建物周囲は、雄大な赤城山がそびえ、点々と存在する湖沼、利根川や敷島公園など、豊かな自然が広がっている。この自然の中に、繊細で美しい建物はみごとに調和している。

やさしい色を求めて、銅を選ぶ

この建物は2021年4月にオープンした「JINS PARK 前橋」。アイウエアブランドJINSが地域コミュニティのハブになることを目指して創業地である前橋市に新施設を建てた。設計は(有)永山祐子建築設計。永山氏はドバイ万博の日本館や、完成すれば日本一の高さとなる東京駅前の「Torch Tower」(2027年度完成予定)など、国内外の話題のプロジェクトを手がけ、今、最も勢いのある建築家の一人である。そんな永山氏にお話をうかがうことができた。

「当初、施主からは店舗は前橋の中心地から離れたロードサイドにあるため、地域に愛され、人々が集まるオープンな場所にしたという要望がありました」

こう経緯を話す永山氏。今回は店舗の外観だけでなく、内部から敷地全体に至るまで永山氏が携わった。周辺の住宅には



(有)永山祐子建築設計
一級建築士
小森 陽子氏

と、色が異なる銅板が複雑に組み合わされていることがわかる。

「壁と屋根を合わせると760㎡、厚さ04mmのりん脱酸銅板を約4トン使用しています。かなり大きい面積の銅がのっぺりとした表面だと、圧迫感が出てしまいます。周囲には住宅もあるため、環境に調和することが求められました。自然の緑が細かな葉の集積で成り立っているように、細かな表情が自然に溶け込むと考えました。そこで銅板のサイズは3種類設けて細かな印象とし、表面は硫化処理後にクリア塗装を行い、クリア塗装の継ぎは行わず、経年変化を楽しめるようにしました。色は明るく、やさしい茶色に決め、その濃淡の範囲内で処理を行うことで、一定ではなくあえて色斑が出るようにしました。屋根と壁面は一体の箱のようなもので、箱を包むラッピングのように銅板を屋根の稜線に合わせて壁面へ折り込むと、壁面は斜め葺きになりました。壁と壁との角は職人さんが尽力してくれて、特殊な形状の部材を作製し、銅板を折り込んだような印象に仕上げてくださいました」

複数のパーツがランダムに配置されているように見えるが、施工は難しくなかったのだろうか。

「無秩序に見えて、実は一定のパターンの繰り返しで銅板を配置し、施工性は十分考

第49回 日本銅センター賞受賞



(有)永山祐子建築設計
代表/一級建築士
永山 祐子氏

若い世帯が増え、子供も多い。そこで建物内部には日常使いできるベーカリーカフェを併設し、多くの人々が訪れるようにした。眼鏡ができるのを待っている間、大階段に座って休んだり、屋上テラスの安全を確保したスペースで子どもが思う存分走りまわったり、親子で楽しめるようにした。

「めざしたのは人々が集う、やさしい空間です。そのため使う素材にはとことんこだわり、内部は木目を生かした木材を多用し、軽やかでやわらかい雰囲気をつくり出しました。一方、外観は重い金属がふつと浮いているような印象を作りたいからです。金属に求めたのはやさしい色です。銅だと、紅葉美しい赤城山にじっくり合い、周囲の土の色や植栽の緑にも馴染む。シルバーやゴールドでもない、アースカラーな銅が最もふさわしかったのです」

このうえない美を作り出す、 繊細な試み

外壁や屋根の銅の表面に注目してみる

感じました。建物の形状は二つの三角形を合わせたようなひし形になっていて、どの角度から見ても形状が一定ではありません。これは小さな模型を何十個も作って検証し、周囲の環境に調和し、視覚的な効果のある形状を追求しました」

こう話すのは同社の小森陽子一級建築士。繊細な工夫の積み重ねで、このうえなく美しい表情と形状が実現された。

最後に銅を建築物に多用した感想を永山氏に聞いてみたところ、「晴れた日は光を受けて輝き、曇りの日はこっくりとした深みが増す。竣工時は艶めいて、時間とともに味わいが出てくる。やわらかさと存在感のある素晴らしい金属」と表現する。熱意を持った説得で、銅の使用を施主に認めてもらった時は飛び上がるほど嬉しかったと永山氏は言う。また機会があればぜひ銅を使ってみたいと、その目は美しく輝いていた。

● 緑豊かな周辺の環境



敷島公園



雄大な赤城山がそびえる